論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	㊙ 乙 第　　号	論文提出者名	小原　圭太郎
論文審査委員氏名	主査　栗田　賢一 副査　下郷　和雄 有地　榮一郎		
論文題名	術後３年間の臨床評価から得られた下顎埋伏第三大臼歯歯冠部切除術の有用性の検討		

インターネットの利用による公表用

（論文審査の要旨）

No. 1　　(2000字以内のこと)　　愛知学院大学

下顎埋伏第三大臼歯抜歯術は、口腔外科で日常的に行われる小手術のひとつである。 その術後合併症のひとつに下歯槽神経損傷に伴う知覚異常・麻痺がある。知覚異常回避をはかる具体的な対策については多くは注意深く抜歯を行う程度の対応が現状であり、近年下顎埋伏第三大臼歯歯冠部切除術が注目されている。しかし、術後長期臨床経過の報告例は少なく、臨床的に歯冠部切除術後の歯根の感染の可能性が考えられてきた。本研究では歯冠部切除術後3年までの中長期的な経過を画像評価ならびに周囲組織の臨床的評価を行い、術後の中長期的な安全性を検討している。

対象は当科にて、歯冠部切除術を施行し、術後3年間継続的に経過観察をおこなえた111歯92人としている。歯冠部切除術術後の評価に関しては、①術後の知覚異常の出現の有無　②歯根摘出に至った症例の検討　③術後3年間の残存歯根および周囲組織の状態　④術後3年間の歯根移動についての検討をしている。

結果は術後の知覚異常の出現は1例（0.9%）に認められ、術後翌日よりビタミンB_{12}製剤の投与をおこなったところ、術後2か月で鈍麻症状は回復した。術後3年間で歯根摘出に至った症例は10例（9%）で、その多くは創閉鎖不全にて術後1年以内に歯根摘出をしていた。2年以降は創部は安定しており歯根摘出の必要症例はなかった。摘出後の下唇の知覚麻痺はみられなかった。組織学的検査が可能であった歯根が10歯中7歯であり、生活歯髄歯根と考えられるものが5歯、失活歯髄歯根と考えられるも

のが2歯であった。歯根摘出に至った歯根の歯髄組織の組織学的所見からみても、歯髄組織内への炎症性細胞の浸潤も認めず、歯科用CT所見でも長期経過している残存歯根根尖部周囲には、根尖病変を疑わせるような透過像を認めていないことから、歯冠部切除術後の歯髄処置は不必要で、生体内に残存した歯根は周囲組織に直接的な影響を与えないと述べている。術後3年間の画像診断学的所見として、歯冠切断面の骨による被覆は術後1年時に101歯中86歯(85.1%)で認められ、術後3年時では99歯(98.0%)で認められた。術後3年時に、骨により被覆されていない2歯については、歯冠部切断面は骨縁下であったが、歯冠の下底部に一部エナメル質の残存が認められた。骨による被覆は長期的にも術後の感染を予防する上で好ましいと考えられ、手術後の長期経過の安全性の評価につながると述べている。

術後 3 年時に下顎第二大臼歯遠心部歯周ポケットが病的と判断される4mm以上あるものについては101歯中8歯（7.9%）で認められた。そのうち下顎第二大臼歯に歯肉縁下に至る歯冠補綴がされていたものが 5 歯、歯周病または歯冠周囲炎にて下顎第二大臼歯遠心部の骨吸収が認められたものが3歯あったが、いずれも排膿所見は認められず、その周囲歯肉に明らかな炎症症状を認めなかった。そのため歯根摘出は行わず、経過観察を継続している。歯冠部切除術を行ううえで、術前の下顎第二大臼歯の評価が重要であり、下顎第二大臼歯の遠心の骨が重度の歯周病や歯冠周囲炎

により骨吸収がある場合、下顎第二大臼歯に根尖病変が認められる場合、下顎第二大臼歯の歯肉縁下にいたる補綴処置がしてある場合などは、術後に歯髄感染や歯根露出をおこす可能性が高いため、歯冠部切除術を行った後に下顎管からの接触の離脱を確認したうえで歯根を摘出する2回にわけた抜歯も選択肢として考えられると述べている。

平均歯根移動量は術後3か月で1.84mm、術後1年で2.88mm、術後2年で3.41mm、術後3年で3.5mmであった。術後2年～3年の間に歯根移動が認められなかった割合は82.2%であった。歯冠側に骨形成がおこる1年以降では移動量は減少し安定する結果となった。歯根移動による歯根露出の可能性については2年が分岐点であると述べている。

歯根移動に有意な差を認めた因子は性別、年齢であり、歯根形態、歯軸角、埋伏深度においては、術後3年時においていずれの間にも有意な差を認めなかった。術前に、歯根移動量が多いとされる若年者で女性の場合は、術後の歯根移動量も考え歯冠切除を骨縁下4mm以上にする必要があり、歯冠部エナメル質を残存させないことが術式として推奨されると述べている。

以上の結果より、歯冠部切除術は十分な術前評価を行い、適切な手術と定期的な術後観察が行われれば、中長期的に安全であることを示しており、下顎第三大臼歯抜歯術に関しての下歯槽神経損傷を軽減できる新しい処置法として有用であり、その長期経過を示した貴重なデータを提示したも

（論文審査の要旨）

No. 4

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

のであり本論文は口腔外科学のみならず、歯科放射線学ならびに関連諸学科に寄与するところが大きいと考え、博士（歯学）の学位を授与するのに値するものと判断した。

平成２５年１２月 １１日